

# カナダ日系移民史<sup>1</sup> 第1部

## 日本人排斥とバンクーバー暴動

菊 池 孝 育

### はじめに

カナダにおける初期の日本人移民は、太平洋沿岸のビクトリア、バンクーバーを中心としたBC州で始まった。その頃の日本人移民の実態は、カナダという国そのものが茫漠として捉えにくいと同様に、かなり曖昧な部分が多い。それはBC州自体が、カナダ連邦の中心からみれば辺境の一州に過ぎず、行政機構も未成熟だったこと(日本人がはじめて移住した1877年は連邦に加盟してまだ6年しか経っていなかった)、それに日本人移住者は密入国や、合衆国西海岸からの越境等の不法な入国形態が多かったことなどの理由によると推測される。1834年(天保5年)に漂着した宝順丸の3人はハドソン・ベイ会社の記録から知ることができるが、その他の初期の移民についての記録は皆無に近い。当時、合衆国でもカナダでも、モンゴロイド系の東洋人はみな一緒にChineseとして記録され処理されたといわれる。従って日系移民史の空白は、移民個々のメモ、日記、書簡等の記録や古老の記憶によってしか埋められない。

日系移民史を俯瞰すると、1877年から1949年までは、先住ヨーロッパ系移民による差別と排斥の歴史であったことが判る。先住者が新入者に対して既得権と優位性を主張して、ある種の差別と排斥がなされるのは、どこ社会でもみられる現象ではあるが、特定の民族に対して、これほど集中的かつ組織的に行なわれた例は寡聞にして知らない。単に既得権や優位性の侵害を阻止する目的からの差別や排斥ではなくて、底流には根強い人種的偏見が潜んでいた気配がある。1991年8月、トロント在住の沖広洪一郎氏(82歳)やレイモンドの長老松木正雄氏(98

歳)は「人種的偏見はなかったと思う。差別されたこともない。排斥はあった。日本人の急増と、その勝れた能力に対する潜在的な恐怖感が彼らの排斥を誘発したのだ。」と異口同音に、差別の存在を否定した<sup>2</sup>。一世の多くは、おしなべて差別の存在を認めたがらないのに比べ、大内省己氏(62歳バーノン在住)やトム・坂本氏(50歳レベルストーク)などの二世、三世になると、「差別はあった。何度も悔しい思いをした。アングロ・サクソン系の人達は今でも人種的偏見をもっている。」と語っている<sup>3</sup>。英語を自由に駆使して、カナダ社会のさまざまな分野で、他人種と互角以上に渡り合っている二世、三世と、狭い日系コミュニティの中で日本語だけで暮らした一世とでは、情報量に決定的な違いが生じ、考え方や感じ方の相違となっている。さらに、一世は、一段低い存在の被差別者になることを、かたくなにまで拒もうとする昂然とした気概を持ち続けてきたのである。その気概が二世、三世に受け継がれ、1942年の「戦時特別措置法」以後の「日系カナダ人社会の大半が受けた権利剝脱と困難」に対する粘り強いリドレス運動<sup>4</sup>に発展したと考えられる。リドレスも1988年、連邦議会におけるマルルーニー首相の日系市民に対する謝罪演説で一応のけりがついた。

1942年以前、BC州に偏在していた日系市民は、現在カナダ各地に散在している。「戦時特別措置法」に基づく連邦政府の拡散政策の目的がほぼ達成されたと考えられる。日系社会は三世、四世の時代に移ってきており、かつてのパウエル街のような日系コミュニティは消滅して、カナダ社会への同化が急速に進んでいる。二世のある老人はこう嘆いていた。「まもなく日本語を話せる日系人はいなくなります。私たちが大事

1941年と1986年の州別日系人<sup>5</sup>

州	1941年	1986年
B.C.	22,096名(95.5%)	21,495名(39.4%)
オンタリオ	234名(1.3%)	20,605名(37.8%)
アルバータ	578名(2.5%)	7,985名(14.6%)
ケベック	48名(0.2%)	1,895名(3.5%)
マニトバ	42名(0.2%)	1,545名(2.8%)
他	151名(0.7%)	985名(1.8%)
計	23,149名	54,510名

にしてきた日本の風俗・習慣も急速に消えていきます。三世の90%以上が他人種と結婚しています。四世になると、顔形から、体型まで日本人の面影はありません。誰が日系人で誰がそうでないのか、見分けがつかなくなっているんです。大和魂もうありません。』<sup>6</sup> リドレス問題の決着で、日系市民の求心力が徐々に弱まりつつある印象を受ける。その危機感からか、日系市民協会は「歴史保存委員会」<sup>7</sup>を設置して、懸命に日本人の移住の歴史を究明しようとしている。上述したように歴史の空白を埋める努力なのである。そしてこの歴史は、かつてカナダの宗主国であった大英帝国が、世界に雄飛したような輝かしい歴史ではなく、日系人一人一人にとって、苦渋と屈辱に満ちた歴史だったのである。

「日系カナダ百年史 千金の夢」から<sup>8</sup>

1973年の夏、国立の精神病院である日系人の老年寄りに出会いました。病歴を調べてみて、その人が32年前に病院に入れられたことが分かりました。1941年に、日系人であることを証明する登録証を持っていなかったばかりに、逮捕され、病院に収容されたということでした。定期的に病院を訪問して、私がこの老人に話そうと試みましたが、「日本語で話しちゃいけない。周りで監視しているんだよ」というのです。英語で話そうとしましたが、老人は英語が話せませんでした。この老人は、自分が何者であるかが完全に解らなくなっていて、私はどうしても意を通じさせることが出来ませんでした。1976年のある訪問日のこと、その老人は食を止(断)ち、死亡したと知らされました。

ある晩、その老人が私の夢の中にあらわれてこちらをじっと見つめました。その瞬間、私は或る思いに打たれました。そして老人に言いました。「この長い年月、私に言ってほしかったのは、おじさんには何の罪もないという事だったんですね。」坂田道子

本稿では、初期の日系移民排撃の象徴的事件である“バンクーバー暴動”をできるだけ丹念に辿り移民史の間隙を埋めたいと考える。そして後日、第2部として“暴動の背景”を探り、太平洋戦争時の強制移動に至る差別と排斥の実態に迫りたい。

数年前、ベトナムを始めとする東南アジアからの難民が、日本にどっと押し寄せた。日本政府は、難民条約を盾に、経済難民であるという理由で、ほとんどの難民を強制送還した。1906年(明治39年)、カナダに密入国して捕えられた82名の日本人(主として宮城県人)は、人道上の理由から最終的に入国が許可された。時は違い場所が異なるけれども、日本政府の頑なな姿勢の中に、我々日本人の独善的、閉鎖的、排他的な態度が見え隠れする。

今日地球上で散見される国家間や人種間の紛争の底流には、ある種の差別と排斥が潜んでいる。そしてその差別と排斥の背後には、明らかに抜きがたい人種的偏見がある。日系カナダ人が感じとった偏見と、アジアの特定の民族に対して我々が抱いていた偏見と、どう異なるのか、日系移民の受難を通して学びとりたいと考え

る。

- 注 1. 本稿では一時的渡航者（旅行者）や渡航後まだ日が浅く、明らかにカナダ市民権を取得していないと思われる者は日本人と表記して、市民権を取得した者あるいはその見込みのある長期在留の者を日系人と表記した。
2. 沖広洪一郎氏はアメリカ合衆国生れの二世でカナダ広島県人会の会長を務めている。吉田茂元首相の秘書官だった小川徳助氏と親交があった。鈴木悦の労働運動（人権運動）にも参加した。1991年7月31日、トロント市郊外の沖広氏の自宅で面談。松木正雄氏は98歳の高齢ながら記憶も弁舌もしっかりしている。数少ない1世の一人。愛媛県出身。1917年に渡加。1991年8月4日、アルバータ州レイモントの自宅で面談。
3. 大内省己氏はカナダ生れの二世。父親は宮城県出身。BC州バーノンで果樹園を経営。1991年8月9日バーノンの千葉猛氏宅で面談。  
トム・坂本氏はBC州レベルストック在住の三世。祖父は福井県出身でハワイ転航組だった。1991年8月6日氏の自宅で面談。
4. 日系人が過去に受けた差別・迫害が、過ちであった事を連邦政府に認めさせ、物心両面の損失に対して補償させるとともに、二度と過ちを繰り返さないことを保障させる運動。  
redress: To set right, as a wrong, by compensation or by punishment of the wrongdoer; make reparation for. (CANADIAN COLLEGE DICTIONARY)
5. Ken Adachi; THE ENEMY THAT NEVER WAS, M & S Inc., 1991, p. 372
6. 千葉猛氏はバーノンで果樹園を営んでいる二世。父親は岩手県藤沢町出身。1991年8月6日に訪問したとき、“私の息子娘3人とも白人と結婚しました。100%です。”と苦笑していた。
7. JAPANESE CANADIAN HISTORY PRESERVATION COMMITTEE (CHAIRMAN; Frank H. Kamiya) 348 Powell St., Vancouver, B.C. V6A 1G4
8. The Japanese Canadian Centennial

Project: 1877-1977 The Japanese Canadians, A Dream of Riches, (日系カナダ人百年史, 千金の夢), 1977, p. 1, プロログより引用

## 第1章 初期の日本人移民

カナダに移住した最初の日本人についての正確な記録はない。1934年（天保5年）初頭、伊勢小野浦の千石船宝順丸の乗組員であった音吉、久吉、岩松の3名が北アメリカ西海岸に漂着した。当時ハドソン・ベイ会社の所有地内のフラッター岬（現合衆国ワシントン州）で救助され、ほぼ1年間、同会社の保護の下にフォートバンクーバー（現ワシントン州）に滞在した。残っている記録では、彼らが北アメリカの地を最初に踏んだ日本人であることは間違いない。しかし、最初のカナダ移民と呼ぶには無理がある。

カナダ日系移民の第1号は、1877年（明治10年）5月に英国船で密入国した長崎の船大工永野万蔵といわれる。ニューウエストミンスターで漁業に従事したあと、1879年頃バンクーバーに移る。当時のバンクーバーはガスタウンが中心で、人口500人ほどの寒村にすぎなかった<sup>1</sup>。彼はその後、製材業、商業、レストラン・ホテルなどを営んで成功するが、火事で全財産を焼失した。1923年（大正12年）失意のうちに帰国した。

1881年（明治14年）、関根という日本人がスティブストンで鮭取りをしていた、という記録がある<sup>2</sup>。日本から直行したのか、サンフランシスコ、シアトルから陸路北上したものか定かではない。

1871年に、ブリティッシュ・コロンビア（BC）はカナダ連邦の一州となったが、連邦政府との往来はロッキー越えの馬車か、パナマ経由の航路（一部陸路）に頼るしかなかった。まさに辺境の州であった。永野が渡った頃は、まだ州政府の行政機構は十分ではなかったと考えられる。当時、諸外国から流入する移民を正確に把握することなどきわめて困難であった。ことに

合衆国西海岸から北上したり、非合法的に入国する東洋系移民の把握は、事実上不可能であった。勿論日本人の数も記録にない。

1883年、タケジさんという人がヘイスティングズ製材所で働いていた。彼が日本人初の製材工だった。本名はタケゾウといった<sup>3</sup>。

1886年はBC州にとってもバンクーバー市にとっても忘れられない年である。というのは4月6日、市制が施行されてガスタウンからバンクーバーになったこと<sup>4</sup>、6月13日には大火があって、市内のほとんどの家屋が焼失したこと(焼失家屋800戸以上)、その一カ月後の7月12日、カナダ太平洋鉄道がバンクーバーまで開通したことなどのためである。大火の復旧と大陸横断鉄道の開通は、バンクーバーに多数の人口をひきつける大きな要因となった。ことに日本人はバンクーバー周辺の木材産業に従事する好機を掴んだわけである。この頃から、日本人はバンクーバー、スティブストン、ニューウエストミンスター等を根拠地に、BC州内で活躍するようになる。またこの年には、スコットランド人と結婚したおかめさんという日本女性がバンクーバーに渡って、3年後に帰国した<sup>5</sup>。その翌年に渡った大屋鷺治の妻ヨウ子<sup>6</sup>が、定住した初の日本女性ということになる<sup>6</sup>。

1887年(明治20年)、和歌山県三尾村の漁師工野儀兵衛がスティブストンに渡った。そこでフレーザー河を溯上する鮭の大群を見て故郷の青年を呼び寄せた。以来三尾村からスティブストンへの移住が続くようになった。1896年までに452人が渡加している<sup>7</sup>。BC州全体では、1895年までにほぼ1,000人の日系人が住んでいたといわれる<sup>8</sup>。この年にはカナディアン・パシフィックの定期船が横浜・バンクーバー間に就航した。日本人移民の急激な増加の条件が整ったのである。1889年には1900年初頭の日系人参政権獲得訴訟の代表だった本間留吉が渡加している<sup>9</sup>。

その後日本人は著しい増加を示すようになった。1896年から1900年までの5年間に12,788人<sup>10</sup>にも上る日本人がカナダに足跡を印している。このことは次表の統計が示すように、かな

りの一時的滞在者や合衆国への通過者を含んでいたと考えられる。

カナダにおける日系人 <sup>11</sup>			
1901年	4,738人	カナダ人口に占める%	0.09
1911年	9,021人		0.13

この頃になると、カナダの先住白人の中に、日本人の流入に対する警戒心も芽生えてくる。危険な作業に低賃金でも働く中国人や日本人に対する反発の兆しが見えてきた。1891年、バンクーバー労働評議会の鉱山労働者が、中国人や日本人の鉱山労働を禁止する決議を採択しようとしたこともそのあらわれであり、東洋人やインディアンを選挙人名簿から除外するという1895年のBC州選挙法の改正<sup>12</sup>も一連の動きと理解される。

1. 新保 満：カナダ日本人移民物語，築地書館，1986，30ページ
2. 今野敏彦・藤崎康夫：移民史（III）アメリカ・カナダ編，新泉社，1986，406ページ，アメリカ・カナダ移民年譜
3. THE NEW CANADIAN, August 9, 1977, The Early Pioneers (By Tomekichi Honma) によると，In 1883, Takejisan was the first Japanese to work in Hastings Mill. His real name was Takezo. となっている。上掲のカナダ日本人移民物語の中の竹爺さんと同じ人物と考えられる。  
THE NEW CANADIAN は日系人向けの日刊英字紙(発行部数約5,000部，本社トロント)
4. VANCOUVER & BRITISH COLUMBIA, COOMBE BOOKS, Toronto, 1987, p. 95
5. 工藤美代子：写婚妻，ドメス出版，1983，17ページ～19ページ
6. THE NEW CANADIAN, op. cit.
7. Dr. M. Yamazaki: THE JAPANESE CONTRIBUTION TO CANADA Published by THE JAPANESE CANADIAN ASSOCIATION, 1940, p. 2, (ブリティッシュ・コロンビア大学—UBC—図書館所蔵)

8. W. Peter Ward: THE JAPANESE IN CANADA, Canadian Historical Association, 発行年不明, p. 4. (バンクーバー市立図書館所蔵),
9. THE NEW CANADIAN, op. cit.
10. Ward: op. cit., p. 4
11. Ibid., p. 4
12. Yamazaki, op. cit., p. 3, "In 1895, an amendment to the B.C. Voter's Act excluded Orientals and Indians from the voter's list."

## 第2章 日系人排斥の流れ

1868年(慶応4年)4月25日に横浜在留アメリカ人、バン・リードが、120名の日本人を契約移民としてハワイへ送って以来<sup>1</sup>、ハワイの日本人は着実に増え続け、1897年(明治30年)には33,000人を越えた<sup>2</sup>。日本人排斥の動きも徐々に表面化して、1896年(明治30年)3月8日と20日の両日にわたって、697人の「日本人移民上陸拒絶事件」が起こるようになった<sup>3</sup>。

一方、アメリカ大陸へは前述の宝順丸の乗組員の漂着を先駆として、学生、米国人の従僕、そして労働者等が移住し、1890年には2,039人(男1,780, 女259)に達していた<sup>4</sup>。合衆国政府も1891年(明治24年)貧困移民の入国を拒否する移住民条令を發布して、移民の規制に乗り出した<sup>5</sup>。1893年(明治26年)になると、サンフランシスコ公立学校の日本人生徒の受け入れ拒否事件や、日清労働者解雇運動などの日本人排斥の動きが、西海岸を中心に顕在化してくる<sup>6</sup>。オレゴン州では、鉄道会社の経営者が白人労働者を解雇して日本人を採用したため、白人労働者が日本人を迫害する行動にでた<sup>7</sup>。危険でも、長時間労働でも、休日がなくとも、低賃金で黙々と働く日本人は、経営者にとって、この上ない良質の労働力であったが、権利意識の強い白人労働者にとっては、協定違反(スト破り)以外の何物でもなかったのである。排日運動が白人労働者を中心に人種差別絡みで広がりを見せる原因がここにある。明治28年11月1日の毎日新聞は「カリフォルニア州の日本人排斥運動

日本の労働者は小額の賃金もて労働に従事し、競争上米人の危害ありとの理由を以て、近頃ふたたび盛んなり。」<sup>8</sup>と報じている。西海岸一帯を席卷した東洋人排斥運動は、実質的に排日運動であったが、カリフォルニア、オレゴン、ワシントンの各州を経て、カナダBC州にも広がった。

1895年(明治28年)、BC州議会は選挙法を改正して日系人から選挙権を剥脱した<sup>9</sup>。続いて1897年(明治30年)、同議会は排日目的の鉄道敷設法案を可決した。同法案の内容は「1. 鉄道工事には、日本人もしくは支那人を使用することを禁ず。2. もしこれを使用したる時は、その雇い主は毎一人の日本人もしくは支那人に対し、毎一日五弗の罰金を課せられるべし。」<sup>10</sup>というものだった。さらに1899年(明治32年)BC州首相は、日本人の雇用を禁止すべきであるという教書を議会に提出した。そのことに対して、日本政府は直ちに英国政府を通じてカナダに嚴重に抗議している<sup>11</sup>。時を同じくして、カリフォルニア州議会も排日決議案を可決した。提案者であるコウワン氏は、「近年日本人労働者の驚異的増加は米国民の労働上及び商業上の利益に大いなる影響を与えていること、また日本人娼婦が社会道徳を乱す恐れがあること」<sup>12</sup>と上程理由を述べている。1900年(明治33年)末には、BC州議会で新東洋人移民制限法<sup>13</sup>を可決して、1901年(明治34年)に早速発動した。同年1月9日、エンプレス・オブ・ジャパン号に乗っていた日本人移民若干名の上陸を拒絶したのである<sup>14</sup>。

また、スティブストンでは1900年(明治33年)に白人漁業者と日系漁業者との衝突事件が起きた。原因は、漁業会社に対し漁価引き上げを要求してストライキ中の白人漁業者と、生活のためには安くとも出漁しなければならない日系漁業者との利害の対立であった。白人側は日系漁業者をスト破りと非難し、その後、陰に陽に日系人を迫害するようになる。翌1901年には発砲騒ぎや棍棒での殴りあいの暴力事件にまでエスカレートした。1902年以降は暴力事件こそ起きなかったものの、白人漁業者による「日系

人を漁場から締め出す運動」<sup>15</sup>は執拗に続けられ、やがては日系人排斥運動と合流して、バンクーバー暴動の遠因となる。

1906年(明治39年)になると、北アメリカ大陸一帯における東洋人排斥運動(日本人排斥運動)は一段と激化する。まずサンフランシスコでは日本人小学生の公立学校からの排除が再燃したり、労働組合主催の大集会で日韓人排斥が決議されたりした<sup>16</sup>。ワシントン州でも東洋人排斥運動は年末から熾りはじめ、翌1907年(明治40年)1月のワシントン州労働組合協会による排日決議となって燃え上がる。同じ1月にはサンフランシスコで日本人移民200名の上陸が拒否された。全員がハワイからの転航者だった。西海岸諸州による日本移民排斥の圧力に屈して、合衆国上下両院は日本移民制限法案を可決した<sup>17</sup>。ハワイから溢れた日本移民は合衆国上陸を拒否され、カナダBC州ビクトリア、バンクーバーへと転航する。このことが下表のような日本人移民の急激な増加となってBC州の排日気運を一気に盛り上げることになる。

#### BC州への日本人移民<sup>18</sup>

1905年	345人
1906年	1,922人
1907年	2,042人

また別の資料によれば、1907年の最初の10カ月だけで、8,125人の日本人が次から次へとビクトリアやバンクーバーに到着した。その45%は合衆国行きのパスポートを所持しており、その後すぐ合衆国入国が認められた。しかし4,500人弱の日本人はBC州に残ったことになる。中には一時帰国者や、一時滞在者もいた。大半はカナダ太平洋鉄道会社の契約労働者であった<sup>19</sup>。事情を知らない一般住民の目には、彼らの仕事を奪う侵略者と映った。“彼らは目的を持ってここにきている。彼らは熱烈な愛国者だ。堅い団結心で結ばれている。彼らが望んでいるのは足場か入り口を確保することなんだ。……一旦彼らの目的が達成されれば、彼らは命令する立場に立つことになる。やがて、日本人の支配

のもとに働くようになって、カナダもカナダ人もきっと悔やむ時がやってくるだろう。”<sup>20</sup>と述べる新聞もあった。都市の新聞は連日センセーショナルな見出しを付けて、日本人の“侵入”を大きく取り扱った。日本人の急増や日露戦争の勝利により、白人は日本人を“東洋人の中で最も重大な脅威”と考えるようになった<sup>21</sup>。

- 注 1. 中外新聞外篇、慶応4年4月(明治ニュース事典編纂委員会：明治ニュース事典I、毎日コミュニケーションズ出版部、1985、盛岡大学図書館所蔵)
2. 報知新聞、明治30年6月8日、(同上事典V、1986)
3. 時事新報、明治30年3月27日、4月4日、(同上)
4. 前掲、移民史、51ページ
5. 東京日日、明治24年6月17日、(前掲、事典IV、1986)
6. 同上、明治26年7月22日、10月6日、(前掲、事典V)
7. 朝野新聞、明治26年4月20日、(同上)
8. 毎日新聞、明治28年11月1日、(同上)
9. Ken. Adachi, op. cit., p. 37. “No Chinaman, Japanese or Indian have his name placed on the Register of Voters for any Electoral District, or be entitled to vote at any election. —Provincial Elections Act of B.C.—”
10. 日本新聞、明治30年5月9日、(前掲)
11. 中外商業新報、明治32年2月18日、(前掲、事典VI)
12. 日本新聞、明治32年3月3日、(同上)
13. Yamazaki, op. cit., p. 3
14. 時事新報、明治34年1月13日、(前掲)
15. Patricia E. Roy: A White Man's Province, British Columbia Politicians and Chinese and Japanese Immigrants, 1858-1914, University of British Columbia Press, 1989, pp. 144-149
16. 大阪毎日、明治39年10月15日、20日、(前掲、事典VII)
17. 同上、明治40年2月19日、20日、(同上)
18. Yamazaki, op. cit., p. 3
19. Adachi, op. cit., pp. 70-71
20. Roy, op. cit., pp. 173-174
21. W. Peter Ward: WHITE CANADA

FOREVER, Popular Attitudes and Public Policy Toward Orientals in British Columbia, McGill-Queen's University Press, 1990, p. 66

### 第3章 東洋人排斥運動の組織化

日本人を満載したクメリック号<sup>1</sup>のニュースは瞬く間にバンクーバー一帯に広がった。政治家の中には自由党の連邦議員、R.G. マックファーソンのように東洋人排斥論の推進者もいれば<sup>2</sup>、内務大臣のフランク・オリバーのように冷静に事態を把握して、過激な論議をたしなめるものもいた<sup>3</sup>。しかし威勢の良い過激派が日に日に反日・反東洋人気運を煽りたてた。

まずバンクーバー商工労働評議会は東洋人移民を制限するように連邦政府・議会要人に圧力をかけるために東洋人排斥連盟 BC 支部を設けた<sup>4</sup>。州議会で何度も可決した東洋人締め出しを目的としたナタール法が、連邦政府の否決や副総督ジェイムズ・ダンズミューアの署名拒否で、日の目を見ないことに業をにやしたためである。ことにダンズミューアは自分の経営するウェリントン炭坑会社が大量の東洋人労働者を必要としたため、ナタール法成立には消極的であったといわれる。だから東洋人排斥論者からは不信の目で見られ、強く非難されていた<sup>5</sup>。この種の連盟は1905年5月に結成されたサンフランシスコの日韓人排斥連盟が最初だった<sup>6</sup>。1907年7月、バンクーバー商工労働評議会は日本人移民調査委員会を設置して日韓排斥連盟シアトル支部と連携して活動を展開した。だがまもなくバンクーバーの支部は“純粋なカナダ人の組織”に改めることに決めた。その方が、カナダの立法府に対して、合衆国の組織の支部であるよりは、より大きな影響力があると判断したためである<sup>7</sup>。1907年(明治40年)8月12日、バンクーバーでも東洋人排斥連盟が誕生し、最初の集会が開かれた<sup>8</sup>。多数の政党役員、議員のほかに400人もの聴衆が参加した。自由党連邦議員のR.G. マックファーソンが次のように基調演説を行なった。「日本政府はカナダへの出国を奨励

している。……まもなくこの州は東洋人のものになるだろう。……BC 州は知らぬ間に東洋人の手に落ちてしまって、このカナダ西海岸はもはやカナダ連邦の領土でなくなることを私には簡単に判る」<sup>9</sup>。あとでビクトリア選出の連邦議員ウィリアム・テンブルトンに、この演説は“暴徒を喚起するものだった”と厳しく批判されるようになる<sup>10</sup>。連盟は労働組合とは一線を画して、中流の白人と二大政党の議員を取り込み、独自の運動を計画した<sup>11</sup>。集会もたびたび開かれ、東洋人排斥の決議も何度も採択した。その都度連邦政府に代表団を派遣して、立法化を迫った。

だが指導者が期待したほどの大衆の支持が得られなかった<sup>12</sup>。集会の出席状態もきわめて悪かった。運動の行き詰まり状態を打開して、大衆の支持と関心を集めるため<sup>13</sup>、大がかりな東洋人排斥集会の計画が立てられた。8月中旬から着々と準備が進められていた。西海岸では最大規模の東洋人排斥集会を組織するつもりであった<sup>14</sup>。

東洋人排斥集会の計画の概要は次のとおりである<sup>15</sup>。

- ① 目的 日本人問題の重要性に気付かずにいるバンクーバー市民を目覚めさせるため
- ② 日時 1907年9月7日 午後7時
- ③ 集会場所 キャンビー通りグラウンド
- ④ 大集会場 バンクーバー市公会堂
- ⑤ 内容 ブラスバンドを先頭に、キャンビーグラウンドから、ジョージア街、グランビル通り、ヘイスティングズ街を経て、ニューウェストミンスター通りの市公会堂までデモ行進する
- ⑥ 構成 ブラスバンド、58の労働組合の代表者、退役軍人、友好団体のメンバー、連盟の目的に賛同するすべての同調者

注 1. Roy: op. cit., p. 188

2. Ward: WHITE CANADA FOREVER, op. cit., p. 66

3. Ibid., pp. 66-67
4. Roy : op. cit., p. 190
5. Adachi : op. cit., p. 72  
日本外交文書第40巻第3冊1738, 172  
~173 ページ (国立国会図書館所蔵)
6. Roy : op. cit., p. 190
7. Ibid.
8. Ibid. また次のような記述もある。  
Howard Hiroshi Sugimoto :  
JAPANESE IMMIGRATION, THE  
VANCOUVER RIOTS AND  
CANADIAN DIPLOMACY, A thesis  
submitted in partial fulfillment of the  
requirements for the degree of MAS-  
TER OF ARTS, UNIVERSITY OF  
WASHINGTON, 1966, (ワシントン大学  
図書館所蔵), p. 119 (Note 42; The  
League, organized in Vancouver on  
August 5, 1907, was one of many on the  
west coast devoted to the exclusion of  
Asiatics in general and Japanese in par-  
ticular, from Canada and the United  
States.)
9. Ward : WHITE CANADA FOREVER,  
op. cit., p. 66
10. Roy : op. cit., p. 191
11. Ward : WHITE CANADA FOREVER,  
op. cit., p. 67
12. Ibid.
13. Roy : op. cit., p. 191
14. Adachi : op. cit., p. 72
15. Roy : op. cit., p. 191

## 第4章 東洋人排斥集会

### 1. 日本における暴動発生の記事

ア) 桑港電報 {十日午後五時五分発}  
一昨夜バンクーバーに猛烈なる日人排斥暴徒数  
千起り日人町を襲ひ百余の店舗を破壊す日本  
人義勇隊組織対抗し其十二名を倒す石井通商局  
長久水領事暴徒に囲まれ投石されしも無事ホテ  
ルに逃げ込み<sup>1</sup>

イ) 東京電報 {十一日午後五時二十五分頃}  
桑港バンクーバー暴徒其後平穩日本人猶警戒中加  
奈太政府民兵派遣日人保護を支庁に訓令す<sup>2</sup>

ウ) 英領バンクーバーに於ける日人排斥運動は其後  
益々甚だしきを加へ去る六日頃暴徒若干日本人  
の居留街に侵入して暴行を加へたる由折柄滞  
在中の石井局長は親しく其状況を見て直に能勢領  
事に打電し同領事は加奈太首府に向つて交渉し  
たるが右に就き首相は適當の措置を取る旨を誓  
ひ直に警戒を加へたりと云ふ目下同地には布哇  
より転航する本邦人頻りに増加するより労働派  
の団は日清人排斥会なるものを組織して盛ん  
に示威運動を開始し之を拒絶する為必死に奔走  
し居れる由なれば今回の暴行も是等の団に依  
てなされたるものなるべしと云ふ<sup>3</sup>

1907年(明治40年)9月7日、カナダ・バン  
クーバーで発生した暴動について、11日から12  
日にかけて日本の新聞は以上のように伝えてい  
る。ア)の第一報はやや正確さを欠くが、カナ  
ダ移住者の関係者、出稼者の留守宅にとつては、  
衝撃的な報道であった。翌日のウ)は、事件の  
本質について正鵠を得た報道であったが、関係  
者の愁眉を開くには至らず、深い憂慮の念を  
もって事件の推移を見守っていた。

### 2. 東洋人排斥パレード(デモ)の集結

明治40年(1907年)9月7日土曜日、バンクー  
バーの夕刻は、晴れてはいたが、息苦しいほど  
蒸し暑かった<sup>4</sup>。その日、バンクーバー東洋人排  
斥連盟主催によるパレード(デモ)と集会が予  
定されていた。東洋人排斥連盟は表向き東洋人  
排斥となっているけれども、実際は日本人排斥  
を目的に組織されたものであった。合衆国のサン  
フランシスコ、シアトルなどでは既に結成され  
た<sup>5</sup>。バンクーバーではこの8月12日に結成され  
たばかりであった。この日のパレードと集会  
の目的は日本人移民の急激な増加に対する抗議  
の意思表示であり、東洋人移民に反対する地元  
の感情を大いに盛り上げて連邦政府の注意を喚  
起することであった。7時頃になると、群衆はあ  
らかじめ定められていた集合場所のキャン  
ビー・グラウンドに、続々と集結し始めた。連  
盟は、労働組合や友好団体の構成員、退役軍人、  
連盟の趣旨に賛同する人々など、あらゆる階層



に参加を呼び掛けていた。700～800人<sup>6</sup>の群衆が集まった。その中では、新たな日本人移民が間もなく入港する等といった流言蜚語が飛びかい、不穏な空気がみなぎっていた。

### 3. パレード（デモ）の構成

7時過ぎにデモ隊は出発した。連盟役員を乗せた馬車が先頭に立って、その後にはその晩の演説予定者、女性同調者、約2,000人<sup>7</sup>の群衆と続いた。デモ隊には鼓笛隊を含む3つのブラスバンドが参加していて、“Rule Britannia”, “The Maple Leaf Forever” など愛国的な曲を演奏していた。群衆は“我々白人のためのカナダ”と記した旗や、“白人のカナダを支持”等と書いてある横断幕を持って行進していた<sup>8</sup>。副総督ダンズミューアのボロ人形を高々と掲げ持つものもいた<sup>9</sup>。デモの群衆はジョージア街を西へグランビル通りまで進み、そこで右折してヘイスティングズ街に北上した。行進につれてデモ隊の数もふくれあがって、5,000～6,000人<sup>10</sup>となり、ヘイスティングズ街でまた右折して東に進み、ウエストミンスター通り（現在のメイン通り）に到着した時は8,000人以上<sup>11</sup>にもなっていた。その夜の演説会場に予定されていたのは市公会堂で、ウエストミンスター通りの西側（現在のメイン通りとキーファ街との交差点の近く）にあった。

### 4. 排斥大集会（場内）

市公会堂に集結した群衆は、当着順に公会堂の中に入った。聴衆はぎっしりと詰まっていた。（約2000名）<sup>12</sup>。騒めいていたが、節度と秩序は保たれていた。A.W. ボン・ライン（連盟指導者、バンクーバー商工労働評議会副会長）の司会で、予定どおり次の人たちが演説した。（「」内は演説要旨）

（1）フレイザー師（神学博士、バンクーバー長老派教会牧師、熱狂的な東洋人排斥運動家、この夜もデモの先頭に立った。）

「もし東洋人流入に対して適切な手段が取られなければ、教会の聖壇さえも日本人の手に奪われることになる。……アングロ・サクソン

の純粋な血こそ、この大英帝国を築き上げてきたのだ。それをアジア人の血で汚してはならない。……白人のカナダを保とうではないか。」<sup>13</sup>

（2）G.H. ウィルソン師（バンクーバー英国国教会牧師<sup>14</sup>、東洋人排斥運動同調者）

「最近合衆国で起こったような暴力事件を伴わないこと、そしてキリスト教主義の英知で問題を解決することを期待する。」<sup>15</sup>

（3）A.E. ファウラー（東洋人排斥連盟シアトル支部事務局長、コックだったが芸術家を自称、この2日前ワシントン州ベリンガムで起きたインド人ヒンドゥー教徒虐殺事件の首謀者の1人）<sup>16</sup>

「東洋人を無条件でしかも永遠に追放せよ」<sup>17</sup>

（4）W.A. ヤング（アメリカ労働総同盟シアトル支部オルグ）

「“黄禍”を遺憾に思うが、合法的手段で排斥しよう。」<sup>18</sup>

（5）J.E. ウィルソン（ニュージーランド労働運動家、弁術に長けた扇動者、たまたま旅行訪問中だった。）

「ニュージーランド、オーストラリア等の植民地から、どのようにして支那人を追放したか、その事例から学ぶべきだ。」<sup>19</sup>

（6）H. コウワン（自由主義労働運動の実力者）

「移民法は全く連邦政府の責任だ。連邦政府が何も手を打たないなら、市民が直接行動を取るようになる、と政府当局が気が付くまで、運動を続けよう。」<sup>20</sup>

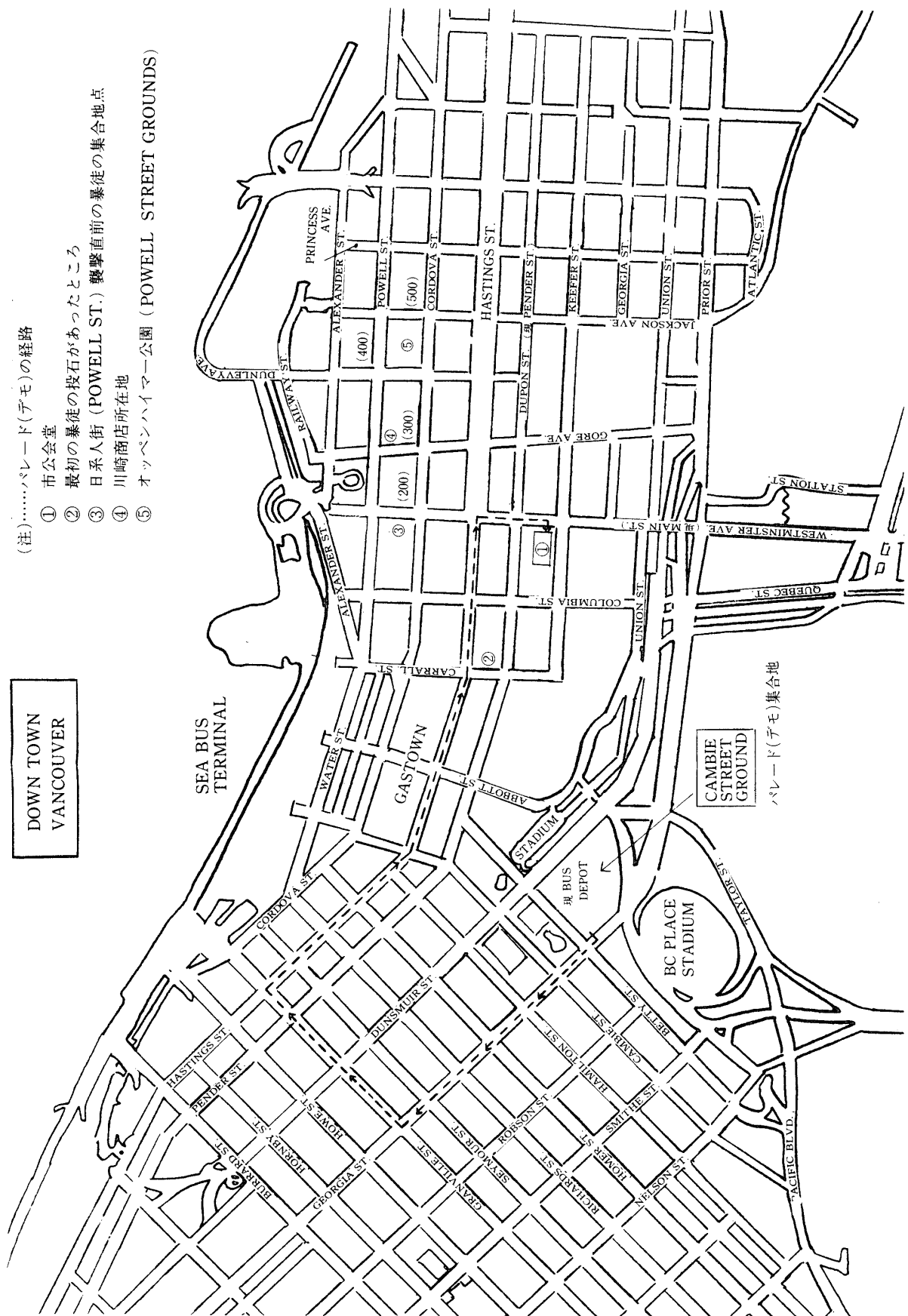
（7）C.D. ウッドワース（バンクーバー保守主義者協会会長）

演説内容不明

（8）地元の2名の弁護士

氏名、演説内容とも不明

それぞれ演説者は、低賃金労働の排除、アングロ・サクソンの純血の保持、連邦政府によるナタール法の承認等に言及したが、格別新たなアイデアはなかった<sup>21</sup>。にもかかわらず、会場は熱気に溢れ、東洋人（日本人）排斥についての激烈な表現には、割れるような拍手と歓声が沸き起こった。感情的、扇情的な内容の演説が終



わった後、次のような決議が採択<sup>22</sup>されて午後11時半ごろ閉会した。

- ① マックブライド首相が、ナタール法の署名を拒否している副総督ダンズミュアを容認する理由の釈明を求めて、彼を次の集会に喚問する。
- ② 英国と連邦政府は、日本以外の地域（ハワイ）からやってくる日本人の入国を拒否すること。
- ③ 連邦政府はただちに、あらゆる階層の東洋人移民の上陸を禁止すること。
- ④ カナダから東洋人を永久にかつ完全に排除することを妨げるすべての条約協定を廃止すること。
- ⑤ 連邦政府と合衆国政府によってこの集会の要求が受け入れられることが、国の平和と秩序を守る唯一の手段であること。
- ⑥ 1907年のBC州移民法（ナタール法）を立法化すること、さらにカナダ全土からの東洋人排除の立法化を行なうこと。
- ⑦ シアトルの排斥連盟と緊密に強調・連携して活動すること。

##### 5. 排斥大集会（場外）

一方、演説会場に入れなかった群衆は、副総督ダンズミュアのボロ人形に火をつけて、氣勢を上げた。彼が、州議会で可決した新移民法（東洋人移民排斥を目的としたナタール法）の署名を拒否したことに対する、嫌がらせと抗議のために燃やしたのである。群衆は続々と増し、野次馬も含めて3万人<sup>23</sup>近い数となった。三々五々周辺の街路をうろつくものも出てきた。勝手に横断幕を掲げて「東洋人排斥」と叫ぶものもあった。指導者の居ない場外では、徐々に無秩序な空気が漂いはじめてきた。デマや噂が飛びかい、収拾のつかない状態だった。会場内にいた演説者が時折出てきて、中で話した内容を繰り返した。あるものは電柱によじ登って演説した。群衆の中から即興にアジ演説をするものも出た。みな一様に、東洋人がBC州を蒙古系人種の州に変えようとしている、と危機感を訴えた。やがてA.E. ファウラーが電柱によじ登り、

ワシントン州ベリンガムでのインド人追放事件に言及して、“ベリンガムでやったことをここバンクーバーで出来ないことはない。”ということを示唆する演説を行なった<sup>24</sup>。このファウラー演説は、扇動的な内容から群衆をアジる結果となり、暴動への起爆剤となった。（ファウラーは、群衆を静めるつもりで電柱に登ったが、結果的に扇動になってしまった、という説もある<sup>25</sup>。）“この行動は暴徒一人一人に見受けられるならず者の側面に、決定的な悪影響を及ぼした。ボロ人形がまだ燃えているうちに、ある暴徒団が横断幕をいくつか奪い取ると、近くのデュポン街の方へ、動き始めた<sup>26</sup>。”中国系人街はデュポン街（現在のペンダー街）の南、1ブロック足らずの所にあった。日系人街は暴徒の動きとは反対の方向、北東2～3ブロックの所にあった。この地理的条件が、ある面で、日系人に幸いしたのである。

- 注 1. 岩手日報、明治40年9月11日、（岩手県立図書館所蔵）
2. 同上
3. 同上、明治40年9月12日
4. Ward: WHITE CANADA FOREVER, op. cit., p. 67
5. Roy: op. cit., p. 190
6. Ward: WHITE CANADA FOREVER, op. cit., p. 68
7. Roy: op. cit., p. 192
8. Ward: WHITE CANADA FOREVER, op. cit., p. 68
9. The Vancouver Daily Province, Sept. 9, 1907, “……figure of straw and old clothes……”（UBC 図書館所蔵）
10. Adachi: op. cit., p. 72
11. Ward: WHITE CANADA FOREVER, op. cit., p. 68
12. Ibid.
13. Adachi: op. cit., p. 73
14. Roy: op. cit., p. 192 次のような記述もある。  
Sugimoto: op. cit., p. 124, (Note 58; Rev. Wilson was the minister at St. Andrew's Presbyterian Church.)
15. Ibid.

16. Ibid., pp. 124-125, (Note 59)
17. Ibid., p. 125
18. Ibid.
19. Ibid.
20. Ibid.
21. Roy: op. cit., pp. 192-193
22. Ibid.
23. The Vancouver Daily Province, op. cit.
24. Adachi: op. cit., p. 73
25. Roy: op. cit., p. 193
26. Sugimoto: op. cit., p. 122

## 第5章 暴 動

### 1. 暴行のはじまり

市公会堂ではまだ集会は進行中だった9時頃<sup>1</sup>、漠然と“何かやってやろう”という感じの群衆の一部が、市公会堂から2ブロックほど離れたカール通りを徘徊していた。ヘイスティンズ街とデュポン街の中間辺りで、一人の軽率な若者が放り投げたレンガが、たまたま中国系人の商店の窓ガラスを割った<sup>2</sup>。これが思いがけなく周りの人達からやんやの喝采を浴びた。皆、面白半分に手当たり次第、投げ出した。これが切っ掛けだった。その行動が、東洋人流入に対する鬱積した憎悪への爆発となった<sup>3</sup>。群衆は自制心を失って、暴徒と化し、無茶苦茶な暴力行動を取り始めた。街路を何度も往復しながら、石を集めては、中国系人の建物目掛けて投げ付けた。ガラスの割れるたびに歓声が上がり、その歓声が怒声を生みだし、次の破壊を誘発した。目につく窓すべてを破壊し尽くす勢いだった。

### 2. 中国系人への暴行

中国系の人たちには青天の霹靂だった。はじめ、何が起こったのか皆目見当がつかなかった。慌てふためく人たちもいたが、すぐさまバリケードを築き堅くドアを閉ざした<sup>4</sup>。殆どは屋内に身を潜め、じっと嵐の通りすぎるのを待っていた。窓ガラスの割れる音、ドアを叩き割る音、ビンが碎ける音、壁にレンガが当たる音。凄まじい破壊がしばらく続いた。“後に起こることを恐れて、彼らは一切抵抗しなかった。暴徒の去っ

た後、歩道には碎けた窓ガラスや、商店のショーウィンドーの破片がうずたかく散乱していて、人一人として見えず、シーンと静まりかえっていた。”<sup>5</sup>

### 3. 日系人への暴行

暴徒はありったけの破壊活動をし尽くした後、一種の虚脱状態に陥って、一息入れた。しばらく小康状態が続いた<sup>6</sup>。やがて、彼らは排斥のターゲットが中国人よりも日本人に対してであることに気がついた<sup>7</sup>。誰かが“次はジャップだ。奴らをやっつけろ”と叫びながら、日系人街の方を指差した。叫び声は波紋のように伝播して、2~3ブロックに散在していた暴徒たちは、雪崩れるようにパウエル街の方向に動き始めた。暴徒の大半はウエストミンスター通りのコードヴァ街とパウエル街の間に集まる結果となった。ここは市公会堂からほんの2、3ブロックの距離だった<sup>8</sup>。

暴徒の跳梁はウエストミンスター通りとパウエル街の角で始まった。南東の角に、日用雑貨を取り扱っている店があった<sup>9</sup>。まずそこが暴徒の標的となった。彼らは投石を繰り返して、建造物や商品に大損害を与えた。その頃になると、暴徒の数は野次馬を含めて、ほぼ1,000人<sup>10</sup>だったといわれる。数が増せば増すほど、凶暴性を帯びていった。その現場の目撃者のひとりである日系二世のフランク・上原氏の生々しい体験談によると、

「暴徒が来るぞ、という声が出た。辺り(パウエル街)は真っ暗で、静まり返っていた。重苦しい程の静けさだった。やがてざわめきが伝わってきて、だんだん大きくなってきた。間もなく大勢の足音が響いてきた。声も聞こえてきた。母親たちは子供をしっかりと抱き締めて、暗い奥座敷に潜んでいた。誰も一切口をきかなかった。とうとう暴徒の一団がメイン通りからパウエル街目指してやってきた。手に手に未舗装の歩道から拾った採石を握っていた。窓を目掛けて投げ始めた。……一軒の家から子供の悲鳴が上がって、暗闇を走った。次から次へと悲鳴が続いた。阿鼻叫喚の巷と化した。」<sup>11</sup>

暴徒は投石と棍棒での破壊を繰り返しながら、竜巻のようにパウエル街を通り抜けて行った。息を潜めて隠れていた人々には、とても長く感じられたという。

#### 4. 警官の対応

警官は暴徒に対処するにはあまりにも少なく、為すすべがなかった<sup>12</sup>。バンクーバー警察署では非常呼集をかけて、ウエストミンスター通りとパウエル街の交差点に警官を急派した。正確な人数については不明であるが、10時までには、勤務についていた警察官全員が、現場に到着した<sup>13</sup>。“その夜勤務についていた警察官は、多くてもせいぜい6~7人だった”<sup>14</sup>といわれる。棍棒を抜いて暴徒の規制にあたったが、事実上不可能だった。“規制する気もなかった”<sup>15</sup>のかもしれない。この晩取られた対応策をあげると、次のとおりである。

- ① 暴徒の放火を懸念して、消防隊の出動を要請したこと<sup>16</sup>。(石油を撒いて放火するらしいという噂が飛んだ。)<sup>17</sup>
- ② 暴徒がさらに暴れたり、より危険な破壊活動をやめさせるような予防措置を取ったこと。(具体的には暴徒を街路の縁に寄せようとした<sup>18</sup>、群衆の間に割り込んで、前後に分断しようとしてみたりして、暴徒個々の動きを最小限に留めようとした。)
- ③ 何人かを逮捕したこと。(しかし拘束はできなかった。逮捕者を拘束しても、暴徒が奪い返そうとすれば、簡単にできる状況であったからである。)<sup>19</sup>
- ④ 暴徒が再度、日系人を襲うためパウエル街に向かったとき、警官隊が襲撃団の先頭を押し返そうと試みたこと<sup>20</sup>。(だが、数で圧倒的に勝る暴徒が、逆に警官隊を押しまくる、結果的に警官隊が襲撃団の先導を務める形になった。)

#### 5. 日系人の反撃

当時、このパウエル街に吉江三郎という(有)日加用達会社関係者が住んでいた<sup>21</sup>。彼は3月まで日本領事館書記生だっただけ

に、故国の状況から、国際的な動向、バンクーバー周辺の動きに至るまで、さまざまな情報に精通していた。ほとんどの日系人が突然の襲撃に周章狼狽している時、吉江だけは、何が起こりどう対処しなければならぬか、的確に判断することができた。彼は数名の青年たちと、暴徒の動向を探って、パウエル街の実質的ボスであった中山四郎(日系旅館組合長)<sup>22</sup>に逐一報告して対応策を助言した。同時にパウエル街の日系人に対して、「また暴徒がやってくるぞ。女子供は家の中に隠れておれ。男は集まれ。」<sup>23</sup>とふれ回った。一方中山は彼の報告と助言を基に自警団を組織し、青木米吉(下宿屋を経営)<sup>24</sup>を団長に頼んだ。男たちは木刀や棍棒をもって続々と集まってきた。中には日本刀を提げて来る者もいた。丁度、北方(スキーナ川)の漁期が終わったばかりで、血気盛んな青年が多かった<sup>25</sup>。青木は吉江と相談しながら、テキパキと事を進めた。その夜の対応策<sup>26</sup>は次のとおりだった。

- ① 屋上班 石、レンガ、空きビンを拾い集めて、川崎商店の屋上に運び揚げ、暴徒めがけて投げ付ける。
- ② 地上班 棍棒、木刀、日本刀等で武装して、最前線で暴徒を食い止める。偵察も兼ねていた。
- ③ 救護班 負傷者の収容と応急手当をする。
- ④ 炊き出し班 自警団の食事を用意する。

屋上班と地上班には屈強な若者が当たり、救護班には体の弱い人や中高年の人たちが当たった。炊き出し班は女性の担当だった。

#### 6. 日系人側から見た反撃の実態

新保満教授は著書の中で、日系人側の資料に基づいた暴動の実態と地元英字新聞の資料によるものとの違いを指摘しながら、次のように記述している。

1) 「第2回目の暴徒がやってきた。夜の9時半頃である。刀をふりかざしたりステッキをもってまち構えていた日系人の自衛隊がウエストミンスター街におどり出てきた。最初に逃げだしたのは巡査だったという話である。白人に二人程負傷者がでたので暴徒はびっくりしてにげだした。屋根の上の石はついに投げずじまいだった。第3回に暴徒がおそってきた時は連邦騎乗警官が追いちらした。こうして第2回目も第3回目も暴徒は日系人街の入口で追い払われたことになる。不幸中の幸いだが死者は一人もでなかった。以上は邦語の資料が画く暴動の経過である。」<sup>27</sup>

この下線部の記述は目撃者の談話やこの場に居合わせた人たちの証言とはかなりの違いがある。また当時の地元新聞の報道を素材にした論文とも食い違いがある。以下にその幾つかを紹介する。

2) 「あれはおれが二十才の時の九月だった。彼は一気にしゃべりだした。こうなるととどまることを知らないように、その日の様子を身振りを入れて詳述した。毛唐という言葉をしきりに使った。もともとあの暴動は毛唐が計画的に起こしたものだ」と彼は云った。殺してやりたかったが、殺すな殺すなと日本人街の長老たちが云うので追い散らしたのだと、そのあたりのところは特に力が入っていた。日本刀を振りかざして切りこんで行くと、巡査が真先に逃げ出し、その後を毛唐たちが逃げた。彼等は逃げながらピストルを放ったが一発も当たらなかった。日本刀と屋根からの投石で、彼等はすっかりおじけづき、結局、退いていった。彼は一息ついた。彼の前に地図を出すと、ここをこう通ってこの方面から暴徒が攻め込んで来たのだとその道順まではしっかり覚えていた。その時二十歳というから少なくとも今は九十二歳をすぎている筈だが、その元気なことは驚くばかりである。」(「密航船水安丸」取材記 335～336 ページ)<sup>28</sup>

“密航船水安丸”そのものはフィクションであるが、取材記は信憑するに足る資料と考えられる。カナダの日系社会の歴史と動向に詳しいカナダ・タイムズ社長田場国男氏は次のように語っている。

3) 「力松金太郎が、日本刀を振りかざして暴徒

に切り掛かったのは事実だ。新田氏が元船員と書いているが、実は鮭とり漁夫だった。スキーナ河の漁期が終ったばかりで、他の若い衆と一緒に、パウエル街でゴロゴロしていた時だった。山口から来た活きのいい男というのが当時の評判だったようだ。他にゴム製のボール(棍棒)をもって殴り込んだ荒くれどももいた。屋根からはレンガやこぶし大の石を投げ付けたのだから、少々怪我で済む筈がなかった。白人の中に死人も出たという噂も飛んだ。当時は世界各地から移民が入っていて、一人や二人不意に消えても誰も何とも思わなかった。当時のバンクーバーは要するに西部劇の田舎町の一つにすぎなかった。

はじめ、中山訊四郎や吉江三郎が警察に保護を要請したが、白人側の肩を持つ警察は、“この騒ぎには警察は関知しない。自分の生命財産は自分達で守れ。” といって取り合わなかった。それで自警団を組織して、対抗したのが真相だ。だから、白人暴徒の中に死人や重傷者が出て、表沙汰にするわけには行かなかった。もちろん日系人に一人の逮捕者も出なかった。東洋人排斥を煽った地元新聞も、白人暴徒が敗走して、死人や重傷者が出たことを報じるのは、面子にかけてもできなかった。」<sup>29</sup>

以上から日系人が組織的反撃を行なったこと、警官が暴徒の先頭にいたこと、怪我人が出たことなど、共通する点は事実と考えられるが、警官が先頭にいたのは暴徒の行く手を阻止しようとしていたのが、たまたま暴徒に押されて先頭に立つ結果になったと考えられる。また怪我人、死者についてはどうだったのか、地元新聞による報道を中心とした事件の経緯をたどってみる。

4) 「暴徒たちは再びパウエル街に向かった直後、初めて彼等の敵と最前線で遭遇した。あらゆる種類の武器が防御側に現われた。それらは効果的に使われた。それまでずっと家の中に閉じこもっていた日系人は、ますます物や石が店や家の窓を通して飛び込んでくるにつれて、もう我慢ができないと思った。とうとう、真の大和魂で奮起して、彼等は外に向かって突進した。“万歳”と甲高い雄叫びをあげて、接近中の暴徒の集団の真っ只中に襲いかかった。暴徒は周章狼狽し、戦いは白兵戦になった。間もなく流血の惨事が出来た。大混乱に陥った群衆は、罵り喚きながら走り回った。防御側は一旦攻撃すると素早く再結集してまた突撃した。そのたび

に“万歳”を叫んだ。負傷者が出ると素早く、付近の建物に運び込んで保護し、手当てした。一方、屋上に運びあげられていた“飛び道具”は下の暴徒めがけて投げ付けられた。街路で慌てふためいている暴徒の頭上に、空ビン、缶類、レンガ、石、小石、薪切れ等が降ってきて、更に混乱させた。このような思いがけない、しかもまごつくような経験に直面して、侵入者は避難したり、逃げ去ったりするものも多かった。攻撃を続けるものもあった。

警官は、よく知られている伝統的法執行に基づいて、ピストルを抜いて突進し、規制しようとした。暴徒の先頭は、ゆっくりとしているが容赦なく、単なる群集心理の爆発で進んでいるようだった。この白兵戦が行なわれた三ブロックの街路内で、攻撃側は徹底的に打ちのめされた。残存した者もオープンハイマー公園地域で四散した。

(注：日系人の武器はナイフ、石、棍棒、ビン等だった。首のところで割れたビンは鋭利な短刀になった。)<sup>30</sup>

5)「暴動は実際の戦争でしたよ。私がハンゴを駈けのぼった時、男が私を追っ掛けて登ってきたんです。奴をやっつけたんですが、後で仲間だとわかったんです。あの晩は私も兵士みたいなものでした。」<sup>31</sup>

屋上班の迎撃の拠点になった川崎商店は、ゴア通りとパウエル街の南東の角にあったと推定される。1930年代までその建物の二階に川崎某<sup>32</sup>という人が住んでいたこと、事件の経緯を伝える色々な記述を総合すると、ゴアとパウエルの交わる点以外に、川崎商店の存在を特定することは難しいこと、以上二点の理由による。

まず暴徒はウエストミンスター通りからパウエル街に突入して、半ブロック程東に進むと、小道がパウエル街を南北に横切っている箇所にくる。その小道の両側に潜んでいた地上班が、進んでくる暴徒に襲いかかって、白兵戦となった。ウエストミンスターとパウエルの交差点で、警官隊は暴徒を阻止しようと努力するが、圧倒的に数に勝る暴徒に、ずるずると押されて小道の所まで来た時、背後から日系人に襲われたことになる。この地上班は約20名で、力松金太郎、大河原茂一らが含まれていた<sup>33</sup>。二人とも日本刀を持っていた。日本刀、棍棒、木刀、ビン等

を持って襲いかかったのであるから、警官も暴徒も驚いた。中国人街では一切抵抗がなかったから、組織的抵抗があるなど、予想もしていなかった。ピストルを発射した者もいた。警官隊の威嚇発射と思われる。その証拠に弾丸による怪我人は一人も出ていない。警官は威嚇射撃をしながら後退した。暴徒の大半もウエストミンスター通りの方へ逃走した。だが圧倒的に多い暴徒の一部は、迎撃の間隙をついてゴア通りとパウエル街の交差点までなだれ込んだ時、屋上からの第二波攻撃を受ける。この投石で壊滅的な打撃を受け、オープンハイマー公園（当時のパウエル・ストリート・グラウンド）へと遁走した。この公園に逃げ込んだ暴徒たちは、暗闇に紛れて四散した<sup>34</sup>。

不意に日系人街を襲って破壊の限りを尽くした第一回目の暴徒は、ウエストミンスター通りからパウエル街を通して、プリンセス通りの方へ抜けたとされる。その連中がまた戻ってウエストミンスターから再び襲ったとは、考えにくい。第一回目の暴徒何人かは中にいたかもしれないが、第二回目の暴徒は殆ど新しいメンバーであったと考えるのが自然である。暴徒が何度も往復したような記述も幾つか見られるが、パウエル街の地理的条件を考慮すると、違った暴徒の集団が、間欠的に通って暴行を働いたと見るべきであろう。そしてウエストミンスター通りから最も離れた地点の破壊は、ジャクソン通りとプリンセス通りの北側の日系の家屋であった。暴徒はパウエル街の200番台から500番台のプリンセス通りまで、破壊活動を行なった。しかし同じ500番台にあった日系人メソジスト教会は破壊されていない。新聞は、暴徒の敬虔な信仰心から宗教的殿堂への暴行を差し控えた、と誉めあげたが、実際は、ここに到着したときには暴行を働く気力も体力も残っていなかったというのが真相のようである<sup>35</sup>。

## 7. 終 息

10時過ぎに、また暴徒の一部がヘイスティングズ街とカロール通りの角に集まり始めて、中国人街を襲いそうな不穏な動きを見せ始めたの

で、警官隊は直ちにバリケードでカロール通りを封鎖した。他の戦略拠点も封鎖したので、暴徒は乱暴狼藉ができない状態に封じ込められてしまった。消防署も緊急事態に備えて、要所要所に隊員を配置した。実際石油で放火するらしいという噂が飛んでいたのである。

11時過ぎに、市公会堂の集会から駆け付けた主催者たちは、暴徒に、暴力を慎むように、また解散するようにと懸命に説得した。その中には A.E. ファウラーもいた。何人かは電柱によじ登って、解散して帰宅するようにと再三呼び掛けた<sup>36</sup>。傍にいた暴徒は従ったが、遠くで聞こえないものたちは、中国系人の建物に石を投げつけていた。石が命中するたびに歓声があがった。だが次第に飽きてきて、散り散りに立ち去って行った。中には、夜明けまで辺りをうろつくものもいた<sup>37</sup>。

- 注 1. Ward: WHITE CANADA FOREVER, op. cit., p. 68  
 2. The Vancouver Daily Province, op. cit.  
 3. Adachi: op. cit., p. 73  
 4. Sugimoto: op. cit., p. 128  
 5. Ibid.  
 6. Ibid.  
 7. Ibid.  
 8. Ibid.  
 9. Ibid.  
 10. Adachi: op. cit., p. 73  
 11. Ibid., pp. 73-74, (抄訳)  
 12. The Vancouver Daily Province, op. cit.  
 13. Ibid.  
 14. Sugimoto: op. cit., p. 130, (Note 71)  
 15. 田場国男氏談, (前掲)  
 16. The Vancouver Daily Province, op. cit.  
 17. Sugimoto: op. cit., p. 134  
 18. Ibid., p. 130  
 19. Ibid.  
 20. The Vancouver Daily Province, op. cit.  
 21. 日本外交書(前掲) 1585, 11 ページ, また中山訳四郎: 加奈陀之宝庫, 1921 (国会図書館蔵)によると“明治40年3月依頼免”とある。  
 22. 田場国男氏談(前掲)  
 23. 同上  
 24. 同上

25. 同上  
 26. 同上  
 27. 新保 満: 石もて追われるごとく, 大陸時報社, 1975, IV パンクラー暴動, 46 ページ  
 28. 新田次郎: 密航船水安丸, 講談社, 昭和55年, 巻末取材記, 335~336 ページ(力松金太郎氏との面談記)  
 29. 田場国男氏談, (前掲)  
 30. Sugimoto: op. cit., pp. 131-132, (抄訳)  
 31. Adachi: op. cit., p. 74  
 32. 1930年代のPowell街の地図(日系人協会の歴史保存委員であるMs. Minnie Hattori, 10799 Vista Place, Delta, B.C. から1991年10月に送っていただいたもの)川崎商店の位置についても, Ms. Hattori は1991年12月19日付の手紙で, 次のような suggestion を与えてくれた。“I am told the Kawasaki Shoten was on the corner of Powell & Gore Street. Matsu-no-yu was next to Kawasaki's and then Fuji Chop Suey was next to Matsu-no-yu. Also, Kawasaki Shoten was like a grocery store (candies, fruits, vegetables).  
 33. 田場国男氏談, (前掲)  
 34. Sugimoto: op. cit., pp. 132~133 (Oppenheimer Park に Today's Powell Street Grounds と注を付しているが, The Daily Colonist, Sept. 10, '07 では当時すでに Powell Street Grounds となっている。)  
 35. Ibid.  
 36. Adachi: op. cit., p. 74  
 37. Sugimoto: op. cit., p. 134

## 第6章 その後の情況

### 1. 9月8日午前

日系人による自警団が徹夜でパウエル街の警備にあたったが、警官隊もパウエル街の入り口にあたるウェストミンスター通りに、バリケードを作って警備し、暴徒の侵入を封じていた。これは、日系人を暴徒から守るというよりはむしろ、外部から侵入するものを日系人から守るための警備、と書いた新聞もあった<sup>1</sup>。前夜の日系人の抵抗が、それほど組織的であった、という証左であろう。朝早く日系人の代表が警察署を



訪れ、「自警団が日系人街の秩序維持にあたるから、警官隊は引き上げてくださって結構です。」という申し入れをしている<sup>2</sup>。日系人はみな緊張していたが、自警団のパトロールのもとに、平静な日常生活に戻ろうとしていた。

#### バンクーバーで日清両国人排斥運動

暴動予防訓練 [紐育(ニューヨーク)九月十日電報]  
 晩香坡に於ける白人労働者の威嚇的態度は、日清両国人をしてその業務を廃するの余儀なきに至らしめ、彼等は守勢的態度を取りてその居住区域へ集中せり。  
 加奈太総督グレー伯は晩香坡市長ベッシュン氏に対し特別命令を発し、石井氏を威嚇するため企図せられたる大々の暴動に備うるため、至急嚴重の予防手段を採るべきを以てせり。事態引き続き不安の状況を呈し居れり。<sup>3</sup>

9月8日の午前中にベッシュン市長、森川日本領事<sup>4</sup>、それに折から滞在中の石井吉二郎通商局長の三者が警察署長室で緊急に会談した。この会談で、日本側は日系人の保護と日系人が蒙った被害一切の補償を要求した。市長は、日本人の攻撃から白人の保護を要求する逆提案を行なった、という笑い話みたいな事実がある<sup>5</sup>。当時バンクーバーの日本領事館を中心に、石井局長の滞在中に合わせて今回のデモが企画された、という見方があった。A.E. ファウラーは石井局長がシアトル滞在中に反日集会を計画したが、準備が遅れて実現できなかったことをバンクーバーで実施したというものである<sup>6</sup>。このことはバンクーバーのみならず東京でも広く思い込まれていた節がある。それが上述の下線部の報道になったと思われる。しかし当時のシアトルおよびバンクーバーの新聞報道には、石井局長の滞在を広く知らしめるような記事は、発見できない。同じ日の時事はさらにロイター電として、次のように報じている。

#### 暴動はシアトルの労働者幹部の画策

晩香坡暴動後報 [倫敦(ロンドン)九月十日ロイター電報]

晩香坡に於ける支那人は今回の暴行の不当なるを鳴らして、その家僕たると職工たるとを問わずことごとくストライキを起し、数百挺のピストルを買

い入るに至りたるを以て、ついに警察に於いてピストルの売り渡しを禁止するに至れり。

今回の事件に就き倫敦の官辺へはなんらの公報来たらず、また英国政府よりもなんらの照会をなさざれども、官辺にては大いに本事件を以て遺憾なりとすると同時に、日本がこの暴行の病的現象にして常態にあらざるを諒とすべきを感じ居り、また犯罪者は適用することを得べき最も嚴重なる方法を以て処罪せらるるならん。

聞く所によれば、今回の暴動は若干の米国労働領袖連の画策する所にして、彼等はシアトルに於ける労働大会を終わるや晩香坡に赴けり。その目的、けだし石井氏をして、全太平洋沿岸に於ける労働者の意見の全然一致せることを感得せしめんとするにありしなりと云う。<sup>7</sup>

今回の暴動は、西海岸一帯における長年の東洋人(日本人)排斥運動が底流にあり、決して偶発的なものではない、とする見方が日本の報道では一般的であったが、現地の報道およびその後の調査研究によると、「暴動は計画されたものでもなかったし、アメリカ人の扇動によるものでもなかった。まったく偶発的な出来事だった。」<sup>8</sup>、「暴徒は故意に(暴行を)やったのではなかった。……その行動は行きすぎた興奮の捌け口だった。暴徒の破壊活動は偶発的であって、意図的なものではなかった。」<sup>9</sup>、「アメリカ人の扇動家が暴動を惹き起したという説の根拠は薄い。」<sup>10</sup> というふうに、時事の報道内容に否定的である。だが暴動直後は、地元新聞を中心にアメリカ人関与説が流布していたのも事実である。グレイ総督、ローリエ首相、連邦政府東洋人排斥問題調査官 T.R.E マックインズなどカナダ連邦の高官でさえも“アメリカ人による意図的な扇動”を示唆する考えを述べている。特にグレイ総督は“この不愉快な事件は偶発的なものではなくて、シアトルと他の組織(合衆国反東洋人組織)の意図的暴動だ。”と言い切っている<sup>11</sup>。

## 2. 9月8日午後

午後は天気が良く絶好の行楽日和りだったので、昨夜の暴動を聞きつけた人々がウエストミンスター通り近辺に集まってきた。しかし自警

団のパトロールに遮られて、日系人街を覗くことができなかった。代わりに、滅茶滅茶に壊された中国人街のドア、窓、壁などを見て好奇心を満足させた。中国人たちは麗らかな秋の日差しの中、懸命に破壊の後片付けと補修に従事していた。道路にはガラスの破片が、1インチも積もっていた<sup>12</sup>。市長や警察署長との会談を終えた森川領事は、そのままパウエル街に行った。そして日系人の安全を当局に保障させたことを告げ、集まっていた日系人を説得して解散させた。しかし自警団のパトロールはその後もずっと続くことになる。そして2日後に起こった日本語学校への放火事件も、このパトロールのおかげで大事に至らなかったのである<sup>13</sup>。

夕刻には、カロール通りやコロンビア通りとヘイスティングズ街の交差点の辺りに、また群衆が集まりだし、危険な兆候が見られたが、警官の非常線が効を奏して、比較的平穏に過ぎた。勿論パウエル街も外部から遮断され、自警団のパトロールはこの夜も続けられた。平穏だった日系人街に比べ、中国系人街では、投石や暴力行為が散発的に起こった。

前日の暴動時には無抵抗に撤した中国人も、月曜日になると、自衛手段の必要性から銃砲等武器弾薬を買っていることが報じられた<sup>14</sup>。そしてあらゆる中国系人がそれぞれの職場でストライキに突入した<sup>15</sup>。彼らの仕事はホテル、レストランなどのサービス業を支える下級労働や日系人と同じ肉体労働に従事していた。

### 3. 9月9日

日系人の大半は月曜日には仕事に戻った。しかし半日で止め、オッペンハイマー公園（パウエル・ストリート・グラウンド）で集会を開き、善後策を協議した<sup>16</sup>。日本でも、暴動後の情勢と日本側の対応が次のように報じられている。

#### ① 暴害事件の後報

加奈太晩香坡に於て去る六日同地の日韓人排斥同盟会は大集会を開きたる後日清両国の営なむ商舗に至りて乱暴を働き多大なる損害を与えたるに付き能勢総領事は直ちに之に対し同国政府に向け

抗議を提出したるに首相ローリエ氏は之が善後策に対しては相当の手段を施すべき旨言明したり尚滞在視察中の石井局長よりも同暴民は漸次鎮定の形勢なる旨電報ありたり。<sup>17</sup>

#### ② 晩香坡の邦人保護

晩香坡市長及び警察官は必死となり警戒怠りなく臨時に騎馬警官を設けて日本人町を護れり市民の重なる者は今回の事件を遺憾とし相会して善後策を講究中なり市長は九日市会を召集して秩序回復の方法其他の処置を議する筈八日午後十時頃六七百名程日本人町付近に来らんとせしも騎馬警官之を逐ひ払へり暴行当夜暴民の逮捕せられたる者二十名を超えたり邦人の被害戸数は五十六戸にして負傷せる者二名あり当時暴民は日本人学校に放火せしも直ちに之を消止めたりと。<sup>18</sup>

### 4. 暴動の被害

日系人側はオタワの能勢総領事を通じてカナダ連邦政府に対して、損害賠償を求めた。その額は、暴動による直接の損害額 2,405.45 ドルと、休業補償などの間接損害額 11,113.75 ドルの合計 13,519.45 ドルであった。しかしマッケンジー・キングを中心とする調査委員会は 11 月 8 日、直接的損害 1,553.58 ドル、間接的損害 7,482.42 ドル、合計 9,036.00 ドルと査定して、この額でけりがついた<sup>19</sup>。ちなみに中国系人の賠償額は 100,000 ドルで日系人の 11 倍であった<sup>20</sup>。

家屋の被害は、営業別に計算すると、食料雑貨商 15 戸、宿屋 9 戸、菓子小売 7 戸、湯屋 3 戸、理髪 5 戸、靴屋 2 戸、銀行 1 戸、新聞社 1 戸等、総計 64 戸に及んだ<sup>21</sup>。

負傷者は日系人側に 2 名とされている<sup>22</sup>。一人は 70 歳の老人で、窓から飛び込んできた石をまともに顔に受け、数本の歯がふっ飛んだ。暴徒側にはピンで頭を殴られたもの、匕首で刺されたもの、石で頭を割られたもの、かなりの負傷者が出た<sup>23</sup>。田場氏が述べたように、死者が出ても不思議ではない状況であった。だが公式には死者は 1 名も記録されていない<sup>24</sup>。

この暴動によって、日系人は甚大な物的損害を蒙った。だがそれ以上に、カナダ社会で被差別者とされたことの方がより大きな屈辱であ

り、深刻な精神的打撃だったのである。

- 注 1. Sugimoto : op. cit., p. 137  
2. Ibid., p. 138  
3. 時事新報, 明治40年9月12日, (前掲)  
4. Adachi : op. cit., p. 75, (Consul Morikawa となっているが, 前掲の岩手日報報道では久水領事となっている。)  
5. Sugimoto : op. cit., p. 138  
6. Ibid., p. 125, (Note 59), and also see Roy : op. cit., p. 195  
7. 時事新報, 明治40年9月12日, (前掲)  
8. Ward : WHITE CANADA FOREVER, op. cit., p. 69  
9. Sugimoto : op. cit., p. 135  
10. Roy : op. cit., p. 196  
11. Ibid., p. 195  
12. Sugimoto : op. cit., p. 142  
13. Adachi : op. cit., p. 75  
14. The Vancouver Daily Province. op. cit.  
15. Ibid.  
16. The Daily Colonist, Sept. 10, 1907, (UBC 図書館所蔵)  
17. 岩手日報, 明治40年9月13日, (前掲)  
18. 同上, 明治40年9月14日, (前掲)  
19. Roy : op. cit., p. 204  
20. 新保 満 : 前掲, 48 ページ  
21. 日本外交文書 (前掲) 1747, 199 ページ及び 1764, 200 ページ  
22. 同上  
23. Sugimoto : op. cit., p. 136  
24. Ibid. (第2部へ続く)